

理解度&釣れる度100%



マルキュー

優良 餌本



実寸大  
エサ付け  
&  
オモリ  
解説付き

# サエエサ パワーブック

POWERBOOK

2009

夏



魚釣りを約束する餌本です

## 夏を制するエサブレンド満載

# へらエサ POWER BOOK

2009



**02**  
アウトライン  
初夏から夏のへら鮎釣り

**04**  
両ダンゴの浅ダナ釣り

**08**  
両ダンゴのチョーチン釣り

**12**  
「ヒゲトロ」のセット釣り  
(浅ダナ&短竿チョーチン)

**16**  
「一発」の段差釣り  
(浅ダナ&チョーチン)

**20**  
両ダンゴの底釣り

**25**  
バラケとグルテンの  
セット釣り

**28**  
両グルテン&両マッシュの宙釣り

**32**  
特別講座  
エサ使いのコツを覚えよう

アウトライン

## 初夏から夏のへら鮎釣り

### 多彩な釣り方が 楽しめる季節

初夏から夏へ…。ウキの動きに躍動感が感じられるこの季節は、釣り方も多彩だ。水温が上昇しへら鮎の食いが活発になると、管理釣り場では宙釣りがメインとなる。

浅ダナ、チョーチンの両ダンゴを中心にヒゲトロセット、時にはウドンセット（パワー系）など、へら鮎の食いと混雑状況に応じた攻め方がカギになる。

両ダンゴ釣りでは浅ダナ、チョーチンとに分かれるが、ポイントにはエサのタッチ。ダンゴエサを追い始めた時は、比較的軟らかくまとまりがよいものを追うが、ウキの動きのいい夏に向かうと次第にボ

ソッぽいものが良くなる傾向がある。「ガッテン」、「天々」、「グルバラ」といったまとまりやすい魅をベースに、「バラケマツハ」をブレンドするなどして、力強い動きを出すのがエサ合わせのコツだ。

その一方で、初夏はセット釣りから両ダンゴ釣りに移行する時季でもあるが、本格的にダンゴエサを追うまでの端境期には両グルテンの宙釣りも見逃せない。最近では抜けのいい大きなエサより芯残りのいい小さめのエサで攻めるというスタイルに変わってきて

た。  
この場合、18尺前後の長さオでタナ2m前後を50cmと65〜70cmの長ハリスでムクトップで落ち込みからアタリを狙うスタイルとなる。当たれば

爆釣が期待できるわけだが、初夏は釣れるシーズンが短いので、近況を基にした攻め方が望ましい。

野釣りでは乗っ込みもほぼ終了し深場の宙釣りへとポイントが変わっていく。両ダンゴでダイナミックなアタリが楽しめるのもこの時季で、ここ何年かの傾向ではムクトップを使用し、上55cmと下70cmといった長ハリスでへら鮒にエサを追わせる釣り方が今年も良さそうだ。ポイントはバラケ性のいいエサをしっかりとつけて、ジワジワとバラけてトップの戻りを遅くする。

管理釣り場に比べて魚影が薄い野釣りでは、混み合うとダンゴエサでは太刀打ちできないもの。休日ではくわせエサにグルテンや「一発」を使ったセット釣りに変えるのがセオリー。この場合、へら鮒をしっかりと寄せて足止めできる「新B」、「段差バラケ」と

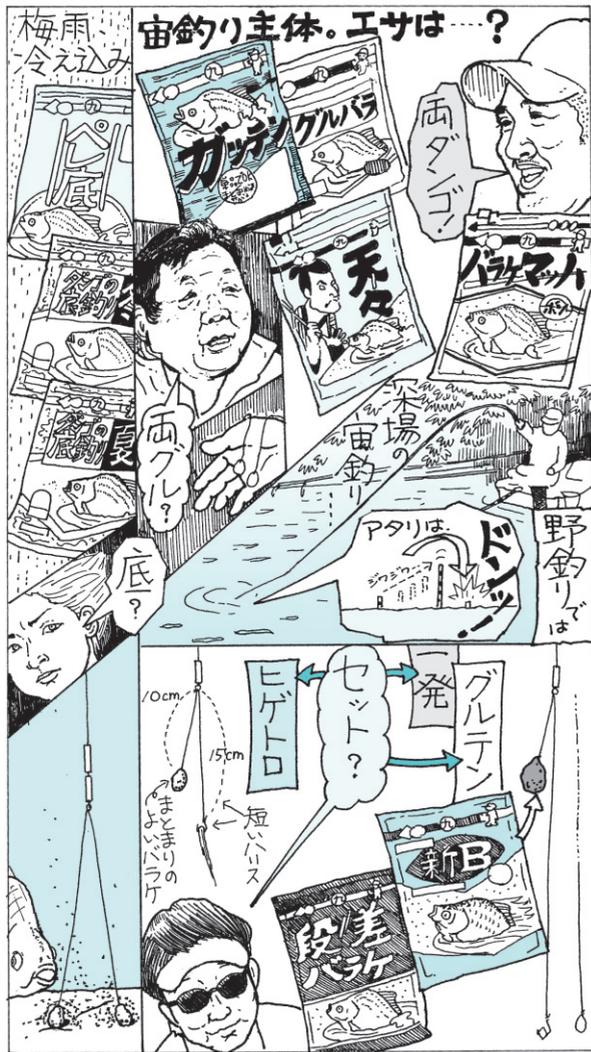
いったエサが今年も威力を発揮することだろう。ここで注意したいのは、必ずくわせエサを持たせること。へら鮒の煽りなどでくわせが抜けてしまふようではアタリがでないので、気をつけたい。

また、放流量の多い釣り場ではタナ1〜1.5mの浅ダナ釣りも面白い。準山上湖、

三島・豊英湖などは両ダンゴだけでなくヒゲトロセット釣りが食い渋り対策として効果がある。この釣りではハリスが、上10cmと下15cmといったきわめて短いものを使うのがポイント。ダンゴエサに似たまともりのいいバラケでテンポ良く打ち返すことだ。

へら鮒が食い渋る要因とし

て混雑の他に梅雨の増水、水温の低下が挙げられる。この場合は底釣りでじっくり攻めるといいうのもひとつの作戦。ウキの動きが良ければ「ペレ」に「ダンゴの底釣り夏」や「ダンゴの底釣り冬」をブレンドするエサ使いが効果的である。



# 両ダンゴの浅ダナ釣り

(タナ1m前後)

● オールマイティーに使える王道ブレンド  
ガッテン600cc＋天々200cc＋  
水200cc＋バラケマッハ100cc



+



+



+



## ●作り方

「ガッテン」と「天々」をボウルに入れ、そこへ水を加えたら指を熊手状にして素早く40回程度混ぜる。2分くらい放置した後、バラケマッハを加え、20回くらいかき混ぜる。

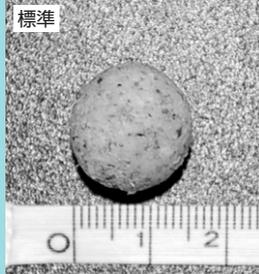
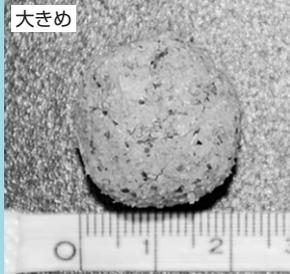
## ●特徴

軽くて適度にエサ持ちし、適度にバラける万能タイプ。練り込んでも使え、そのままでも使えるので、使い方の幅が広い。

## ●使い方のコツと手直し

エサ持ちの調整は、大きさと練り加減で対応したい。持ちすぎる時は小さく付け、持たないときは大きく付けよう。サワリはあるが食いアタリがでないときは、芯残りしてないかもしれないので、10回くらい練り込んで使う。

## ●エサの大きさ 実寸大



# ●適度な重さとバラケ性を備える ペレット系ブレンド

ペレ道200cc+白べら400cc+  
バラケバインダー フラッシュ  
400cc+水300cc



## ●作り方

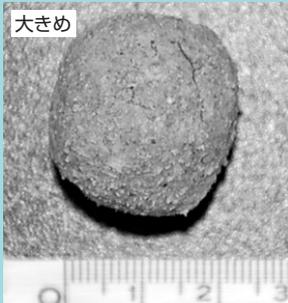
全ての粉をボウルに入れて軽くかき混ぜておき、そこへ水を加え、指を熊手状にして40回くらいかき回す。さらに3分くらい放置後、10回くらいかき回す。

## ●特徴

盛期の管理釣り場において、適度な重さとバラケ具合を持ったブレンド。持たせるのか、バラけさせるのか、重くさせるのか、軽くさせるのかなど、手直しの方向が分かりやすく使いやすいエサ。

## ●使い方のコツと手直し

エサが持たないと感じるときは、「ペレ底」を50ccずつ加えて調整する。カラツンが目立つときは手水で軟らかくしていくが、軟らかくしていつてアタリがなくなってきたときは、「軽魅」を100ccずつ加えて硬くしていく。



## ●エサの大きさ 実寸大

# ●釣り方のコツ

両ダンゴの浅ダンゴ釣りの基本的な考え方は、多くの釣りで場ダンゴ1m規定があるので、このタナで釣らなければならぬ。よって、多くのへら鮎を寄せながら同時にタナを作る。イメージを心掛けたい。ペレット系の場合は、同じように多くの魚を寄せるが、深くナジんだあとでの力強いしっかかりしたアタリを狙っていくと型が揃う傾向にある。

これをウキの動きで表すと、通常の両ダンゴでは、サワリながらナジみが入り、モヤモヤとやや上に持ち上げるようにサワリ、カチツとした食いアタリがでるのが理想。一方、ペレット系のダンゴでは、前触れも大きく、そしてドカッとした食いアタリとなるので、この違いを覚えておこう。

この釣り方で気をつけて欲しい重要ポイントとしては、

ウキが立ってから食いアタリがでるように、仕掛けのバランスやエサの調整をすること。高活性時では、エサ打ち直後からへら鮎のアタックがあり、エサをきちんと持たせないと、サワリはあるのに、いざナジむとアタリがないパターンになる。これをエサだけでなく、ウキの大きさなどにも気を配ってタナまでエサをもたせることが必要となる。

また、ペレット系のエサの場合、食いアタリを欲しがって、小エサにして釣り込もうとしないようにしたい。しばらく時間は掛かるかもしれないが、強いエサを打ち続けることで時合ができてくるので、少し大きめのエサを打ち切る覚悟が必要だ。



## ■セッティング

通常の両ダンゴ  
竿●8~12尺  
ミチイト●0.8号

ペレット系の両ダンゴ  
竿●10~18尺  
ミチイト●0.8~1.2号

通常の両ダンゴ  
ウキ●羽根寸5~7cm  
パイブトツ

ペレット系の両ダンゴ  
ウキ●羽根寸7~15cm  
パイブトツ

通常の両ダンゴ  
ハリス●0.4号  
上15~23cm、下20~27cm

ペレット系の両ダンゴ  
ハリス●0.4~0.6号  
上20~50cm、下30~60cm

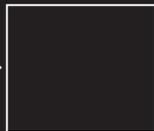
通常の両ダンゴ  
ハリ●上下4~5号

ペレット系の両ダンゴ  
ハリ●上下5~8号

通常のダンゴエサの時は比較的小さいエサが良い場合が多いので、仕掛けは軽くエサを自然な状態に近くしてカラツンがでにくくする。ペレット系のダンゴを使うときは、まずは寄せを重視するが、寄りが多くなったら、ウキの大きさを次第に大きくしていくと釣りやすい。

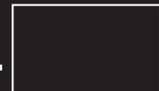
## ●オモリ 実寸大

通常の両ダンゴ



0.25mm厚板オモリ  
17mm×10~  
17mm×20mm

ペレット系の両ダンゴ



0.25mm厚板オモリ  
17mm×20mm~

1g

絡み止めタンゲステンオモリ1g+  
0.25mm厚板オモリ17mm×20mm

## ここがポイント1 Q&A

### サワリがあるのになかなか食いアタリがでないとき

主な原因としてエサがバラケ過ぎていると考えられるので、「ガッテン」を加えかき混ぜると良いだろう。単に練り込んでいく調整法もあるが、一旦練りを入れてしまうとボソに戻せないで、まずは粉を加えて硬さ調整でバラケ具合を抑えてみる。その後で、カラツンなどになったときに軟らかくしながら練りこんでいくと良いだろう。



## ここがポイント2 Q&A

### アタリがあるのに釣れないとき



空振りには、カラツンと糸ズレの2種類がある。カラツンのときはエサを軟らかくしていくが、糸ズレのときは粉を足して硬くし、カチツとしたアタリがでるように調整すると良い。また、エサの大きさや硬さなどを色々に変化させてもカラツンが解消されないときは、ウキの大きさが大き過ぎる場合が多いので、ワンランク小さいウキに変えて様子を見よう。

## ここがポイント3 Q&A

### ウキが動きすぎる ウケやトメがきつく ナジまなくなったとき

このようなときは、エサを硬くしたり練り込んでバラけなくしてやると良い場合が多いが、時にはそのような手直しをすると、ウキが動かなくなる場合がある。そのようなときはエサはそのまま、ウキをワンランク大きくしてやるのが最も効果的だ。



# 両ダンゴのチョーチン釣り

## ●食わせ重視の管理・準山上湖向け

ガッテン400cc＋天々400cc＋  
水220cc＋浅ダナー本100cc＋  
浅ダナー本100cc



+



+



+



+

### ●作り方

「ガッテン」と「天々」をボウルに入れ、そこに水を加える。数分後、「浅ダナー本」100ccを加え、指を熊手状にして30回程度かき混ぜる。自分で付けられる程度の粘りがでたらOK。最後に「浅ダナー本」100ccを軽く絡めるように加えてできあがり。

### ●特徴

軽めでエサ持ちがよくタナで膨らむのが特徴で食わせ重視のエサ。へら鮒が寄ってくると、サワリがでやすく食いあたりも意外と早くでくる。さらに、へら鮒のうわずりさえも分かりやすい。チョーチン釣りでは、軽すぎるのではと思うかもしれないが、手水の調整などでなじみ幅をコントロールしやすくなっている。

### ●使い方のコツと手直し

付けやすいエサなので基エサはいじらず、別のボウルに小出しにしてエサの軽さを殺さないように打ち始める。ナジミ幅の調整はエサの大小で行う。へら鮒のうわずりがきつくなったら手水を打ちながら軽く押し練りする。さらに、寄りがきつい場合は基エサから作り直し、水を入れる前に「粘力」をスプーン1～2杯入れて同様に仕上げる。またタナが深い場合やボソが欲しい場合は「浅ダナー本」を「グルバラ」に変えてみる。



# ●寄せ重視の野釣り場向け

## ガッテン400cc＋天々400cc＋水200cc＋水40cc＋段差バラケ100cc＋段差バラケ100cc



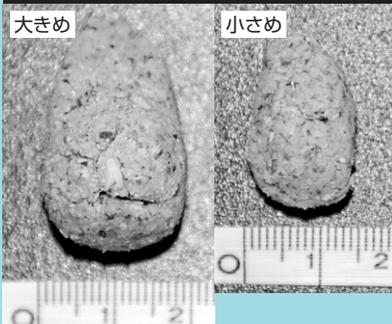
### ●作り方

「ガッテン」と「天々」を混ぜ合わせてから水を入れなじませておく。30回程度練り込み軽く水で戻してから「段差バラケ」を入れて指を熊手状にしてかき混ぜ粘りを調整する。最後に「段差バラケ」を絡めるように入れてボツに仕上げる。

### ●特徴

このエサは「ガッテン」と「天々」を練ることにより芯残りさせ、「段差バラケ」で軽さとバラケ性を加える。寄せを重視しながら釣り込むタイプのエサ。大きめのエサでも付けやすく、上からバラけさせることもできる。さらにボツに仕上げるには段差バラケを追い足すことも可能。管理釣り場や準山上湖でもアタリが遠いときには使用できます。

### ●エサの大きさ 実寸大



### ●使い方のコツと手直し

タナが深い場合やさらにボツに仕上げたい場合は「段差バラケ」を「新B」に変えてみる。エサをやわらかくしたいときや粘りを付けたいときでも必ず指を熊手状にして調整すること。なるべく押し練りは避け、ナジませたいときは手もみでエサ付けするか、後から「粘力」をふりかけてナジミ幅をだす。寄りが悪いときは軽く水で戻して「段差バラケ」を入れていき、この練り返しでへら鮒を寄せていく。



# ●釣り方のコツ

チョーチン釣りは、深いタナを狙う釣り方なので、浅ダナに比べてウキが大きくなりませんが、それでもナジみ込みにいかにサワリをだすかがポイントです。そのためにはエサの大きさとハリスの長さが重要となり、ときには90cm近いハリスを使ったりもします。深いタナになればなるほど、ハリスは長めになる傾向です。

釣り方のコツとしては、トメやサワリをだしながらナジませて釣るのが基本。打ち始めはボソを大きめに付け、魚を寄せることを心がけ、へら鮎の寄りを感じ始めたらエサの表面だけを転がしてへら鮎にエサをあおらせてタナでバラけさせます。タナを安定させながら庄の掛け具合でナジミ幅をだすようにしましょう。理想的なウキの動きは、ウキが立って肩からサワリ、深

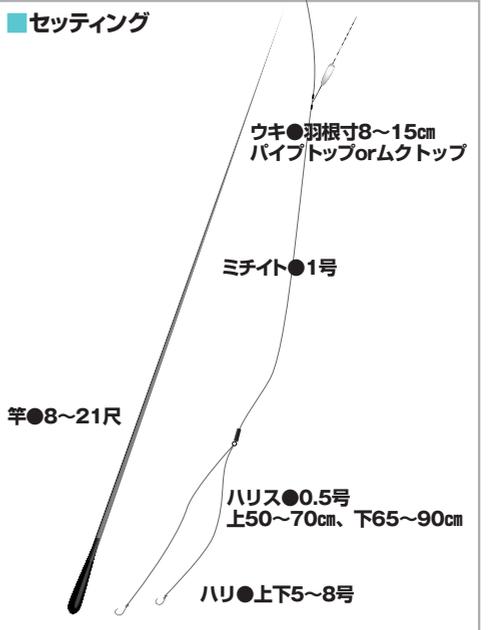
ナジミしてからのアタリ返しで釣れば最高です。ただし、連チャンで釣れるとナジみ込みのサワリが減る場合があるので、時に寄せを考えてエサを打つように気をつけます。しっかりとナジませて釣ることが基本と言いましたが、タナが深くなればなるほど、積極的に攻めていかなければ良い釣果には繋がりません。

タナが深い分、トータルバランスが大切で、エサはもちろん、特にウキとハリりの大きさが重要です。アタリがでる範囲内の大きめのウキとハリを使うことでエサ打ち回数が多くなり、へら鮎を寄せながらタナも安定できるというこの釣りのメリットが生まれてくるのです。

エサはボソが基本なので、なるべくなら、基エサは粒子を殺さないように作ることをおすすめします。

また、エサ打ちのリズムを止めないようにするために、エサは無くする前に余裕をもって作り、釣れてるタツチに合わせておくとよいでしょう。

オモリ 実寸大  
タナ8尺  
1g + 0.25mm厚板オモリ 17mm×15mm  
タナ21尺  
1g + 絡み止めタングステンオモリ1g+ 0.25mm厚板オモリ17mm×35mm



## ここがポイント①

### Q&A サワリがあるのに食いアタリがでないとき

エサが少しバラけ過ぎか、エサが少し軽いのが原因。軽く押し練りを加えながら少しずつ手水を入れて調整し、ナジミ幅をだすようにする。サワリがあつてすぐにエサ落ちになってしまうなら、ウキを大きくするかハリを大きくしてナジミ幅をだすようにする。ナジミでサワリがあるのにアタリがでないとき

は、ウキを小さくするかハリを小さくして対応する。サワリがでているエサは正解に近いので一気にエサを変化させるのではなく丁寧に少しずつ調整することを心がける。またエサ打ちのリズムが悪くなると、サワリがあるのにアタリがでなくなるのでこの点も注意するように。

## ここがポイント②

### Q&A アタリがあるのに釣れないとき

アタリがあるのに釣れないときはエサの持ちすぎが原因。以下の順で対処したい。①エサをラフ付けしたり少し小さくしたりして付けてみる。②手水をつけてやわらかくしていか水でもどしてバラけるエサを追いつす。③粘る材料のエサの配合を減らすか配合は同じでも練る回数を減らす。④アタリの出方で仕掛けを変える（※ナジミ途中のカラツンが

多いときはウキやハリ サイズを大きくしたりハリスの長さや段差をつめてみる。※ナジミきつてからのカラツンが多いときは、ウキやハリ サイズを小さくしたりハリスの長さをのばしたり段差を広げてみる。⑤エサ打ちのリズムをよくしてタナにへら鮎をより多く寄せることでサワリを多くして食いアタリにつなげる。

## ここがポイント③

### Q&A ウキが動きすぎる、ウケやトメがきつくナジまなくなったとき

ウキが動きすぎる場合、とくにスレアタリが多いときはエサがボソすぎるのが原因。次の順で対応したい。①手水を入れて押し練りを加えてなじみ幅をだす。②バラけるエサの配合を減らすか粘るエサや重さのあるエサを加える。③ウキやハリ サイズを大きくする。④ハリスの長さや段差をつめてみる。

ウケやトメがきつくナジまない場合は、エサが軽めで粘りが強い場合へら鮎にあおられ

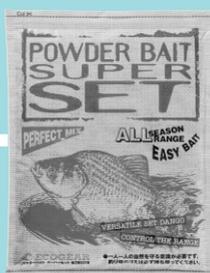
てエサがピンポン状態になるのが原因。以下の順で対応しよう。①重さのあるエサを加える。②手水を入れやわらかくしてバラけさせ大きめのエサでナジませる。③ウキやハリ サイズを大きくする。④ハリスの長さや段差をつめてみる。ただし、あまりにウズリを気にしてウキの動きやウケやトメの抑えすぎには注意する。

# ヒゲトロのセット釣り

(浅ダナ&短竿チョーチン)

## ●浅ダナのバラケブレンド

ダンゴの底釣り夏100cc＋  
ガッテン400cc＋パウダーベイト  
スーパーセット200cc＋水200cc



### ●作り方

全ての粉をボウルに入れ、軽くかき混ぜてから水を加える。指を熊手状にして30回くらいかき混ぜて放置する。2分くらい経ったら、再び指を熊手状にして、さらに20回くらいかき回す。これが基エサとなる。

### ●特徴

比較的軽めでまとまりがあり、手直しがしやすいエサ。また、適度にバラけるので、基本的なヒゲトロのバラケエサと言える。ウキの動きにあわせてエサを手直しするが、その回数が多くてもバラケ性を維持しやすいところが、一番のメリット。

### ●使い方のコツと手直し

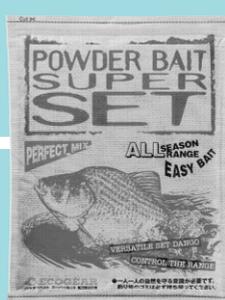
打ち始めは作ったままの基エサを打っていく。持たせたいときは押し練りを10回ずつ加えて様子を見る。大豆ぐらいの大きさの小エサが良いときはシッカリと練り込むことも可能。軟らかく大きくしたいときも手水で手直しが効き、結構いじってもそれなりのバラケ性を保つので、どうしてもエサをいじってしまいがちな人には使いやすい。

### ●エサの大きさ



# ●短竿チョーチンのバラケブレンド

## ペレ道200cc＋スーパーダンゴ 400cc＋パウダーベイトスーパー セット200cc＋水250cc



### ●作り方

全ての粉をボウルに入れ、軽くかき混ぜてから水を入れる。指を熊手状にして30回くらいかき混ぜる。3分くらい放置してから使い始める。

### ●特徴

「ペレ道」を200cc入れているので、重さがあり、また、ペレットの効果で集魚力も強い。それほどまとまりの強い素材を入れていないので、手直しはまとめる方向のみと分かりやすく、練り込んでも問題ないエサ。

### ●使い方のコツと手直し

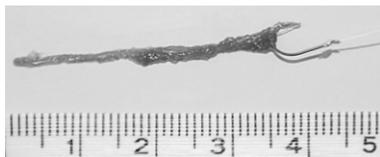
アタリが少ないときはバラケを促進させるが、そのときは手水で軟らかくし、軟らかいエサを大きくつけて寄りを増やす。アタリがあり、魚の寄りがきつくと、ナジミが悪くなったときには、「パウダーベイトスーパーセット」を加えて硬めに手直しすると、ナジむようになる。



### ●「ヒゲトロ」の使い方

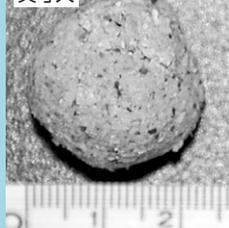


「ヒゲトロ」を容器にあげ、全体が濡れる程度の量の水を入れて硬めにとろろを浸すとしっかり付く。巻きつけるときも、このくらいの水量が最適。小さく付けたいときは、水を多めに入れてヒタヒタにすると簡単。水を多めにする、とろろのダレが早くなるので、こまめなチェンジが必要。抜けやすいときや軟らかくコーティングしたいときは、ハリに付けた後、「感嘆水」に通すと良い。



### ●エサの大きさ

実寸大



※感嘆水は「感嘆」10ccを水100ccで溶いたもの

## ●釣り方のコツ

ナジミをしつかり入れ、バラケが付いているうちにアタらせるようなバラケ調整と仕掛けバランスが必要。ナジミだきり動かないようなら、バラケをバラけさせる（やわらかく）。動きすぎるときはバラケを練り込む、ナジみでから食いアタリがでるまで、遅いと感したらバラケを小さめにする。食いアタリが早く、カラツンが多いときは、バラケを大きめに付ける。

基本的にハリスが短いので、バラケエサのタッチや大きさをウキの動きをコントロールすることに集中する。ハリスを短くすると動かなくなり、長くするとカラツンというときは、ウキの大きさが大き過ぎるので、ワンランクウキの大きさを下げる。

バラケをナジませようとしても上手くいかないときは、

ウキの大きさが小さ過ぎることが多いので、ワンランク大きくする。

理想的なウキの動きは、弱くサワリながら深ナジミをして、ひと呼吸して、弱くサワって間もなくツンとアタるパターンだ。

この釣り方において、絶対に気をつけて欲しい最重要ポイントは、激しくウキを動かさないようにすること。そのためには、余計なエサ打ちをしないこと。底釣りの感覚を持ち、ナジミとサワリに注意し、遅すぎず早すぎずの食いアタリのであるリズムを大切に。



ハリスの長さが重要で、10cmと20cmを基本とし、カラツンや余計なサワリが多いときは上7cm、下15cmにする。基本的に短いハリスで釣るのが釣果を伸ばすコツといえる。

また、ハリの号数を変えることで、バラケエサの大きさや持たせ方、くわせのヒゲトロの量を調整して、釣りやすい接点を見つけることもポイント。ハリスの太さを上下で変えると、絡みが少なくなるので、覚えておきたい。

### ■チョーチンのセッティング

竿●7~10尺  
※釣り場規定の最短~  
ミチイト●0.8号

ウキ●羽根寸  
6~9cm  
パイブトップ

ハリス●上0.5~0.6号  
7~10cm  
下0.4~0.5号15~20cm

ハリ●上5~6号  
下4~5号

### ■浅ダナの釣りセッティング

竿●7~9尺  
※釣り場規定の最短~

ミチイト●0.8号

ウキ●羽根寸5~7cm  
パイブトップ

ハリス●上0.5号7~10cm  
下0.4号15~20cm

ハリ●上5号、下4号

### ●オモリ 実寸大

浅ダナ

0.25mm厚  
板オモリ  
17mm×12mm

チョーチン

0.25mm厚  
板オモリ  
17mm×20mm

## ここがポイント1

Q&A

### サワリがあるのになかなか食いアタリがでないとき

これは、バラケエサがバラけ過ぎているために、食いアタリに繋がらない状態です。いま使っているエサに、基エサをひと握り入れ、少し練り込んでバラケを抑えてみましょう。また、バラケエサを小さくつけてみるのもひとつの手ですが、エサを小さくしたために、サワリも消えてしまうこともありますので、注意が必要です。



## ここがポイント2

Q&A

### アタリがあるのに釣れないとき



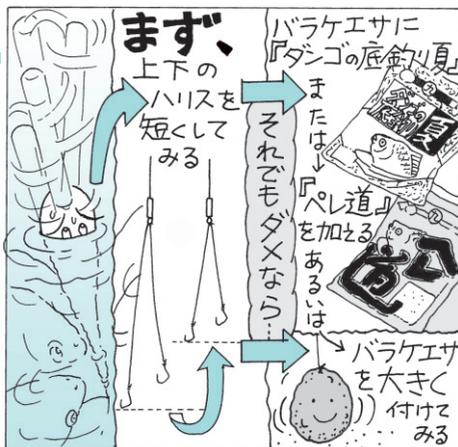
まず、バラケエサに対するカラツンの可能性があります。バラケエサを手水で軟らかくして、持ちすぎないように調整します。また、バラケエサへの反応が強い場合は、下ハリスを短くして、くわせの「ヒゲトロ」にアタらせるよう調整します。

## ここがポイント3

Q&A

### ウキが動きすぎる ウケやトメがきつく ナジまなくなったとき

まずは、上下のハリスを短くしてナジミがスムーズになるか試してみます。それでもダメなときは、「ダンゴの底釣り夏」や「ペレ道」など、重めでまとまりのあるエサをバラケエサに加えます。また、バラケエサを大きく付ける方法もあります。



# 「一発」の段差釣り (浅ダナ&チョーチン)

## ●浅ダナのバラケブレンド

段差バラケ400cc+鬼バラ400cc+  
軽麩400cc+水200cc+  
バラケマツハ200cc



### ●作り方

「段差バラケ」と「鬼バラ」と「軽麩」を良く混ぜ合わせてから水を注ぐ。このときは全体に絡める程度で、決して練りを加えたり、エアーを抜くように抑えたりしないこと。ここで、3~4分放置して、粗めの麩に水が浸透するのを待ち、最後にボソッ気をだすため「バラケマツハ」でしめる。

### ●特徴

「段差バラケ」はこのエサの核になるもので、手もみ次第でバラケ性が調整できる。「鬼バラ」は集魚性が強く、特に浅ダナの釣りには欠かせない強いバラケ性がある。この両者のバラケ性を「軽麩」が絡め、なおかつ静かに膨らむ細かな麩が糸を引くように魚にアピールしていく。更に、「バラケマツハ」でボソッ気をだすことで、エアーの抜き加減をコントロールすることができる。

### ●使い方のコツと手直し

大きめのエサボウルに作り、半分位を別のボウルに入れて微調整する。

①はじめはエアーをたっぷり含んでいるので握るようにエサをまとめて軽く2~3回圧をかける。これでナジミ幅を調整していき、完全にウキが一旦沈没するくらいまで圧をかける。浅いナジミ幅のまま打ち続けるとスタート直後は良いが、寄りが強くなってからは、ナジミ幅をださなくなる。

②そんなときには、残っている半分に手水を打ち、5~6回強く練り込みバラケ性を抑えたダンゴにする。後はウキの動きを確認しながら、寄りが少なければ①のエサを使用して、逆のときには②を打っていく。

### ●エサの大きさ

実寸大



# ● チョーチン釣りのバラケブレンド

## 段差バラケ400cc+新B400cc+ペレ道200cc+水200cc+スーパーダンゴ200cc



### ● 作り方

「段差バラケ」と「新B」と「ペレ道」を粉のままよく混ぜ合わせ、水を注ぎ全体に絡める。「ペレ道」がブレンドされているので、軽くネバリがでないようにするのがコツ。最後に「スーパーD」を振りかけて全体に行き渡らせて完成する。

### ● 特徴

ベースは「段差バラケ」と「新B」で、重さとまとまりを良くするために「ペレ道」をブレンドする。そして、エサ落下中のバラケ促進が「スーパーD」で、アピールを強める。「ペレ道」が200cc入っているので、軽くハリ付けしても重さがありウワズリを抑え、タナにへら鮎をためることができる。また、エサ持ちも良いことから、縦サソイのチョーチン釣りには最適なバラケとなる。

### ● 使い方のコツと手直し

エサを半分位小分けにして、エアーは抜かずハリ付けする。「ペレ道」をブレンドしたエサなので、まとまりは良く、軽く握るようにして形成する。大きめのエサで重さもあるのでハリをエサのセンターに入れなくて簡単にハリ抜けすることがあるので要注意！

### ● 「一発」の使い方

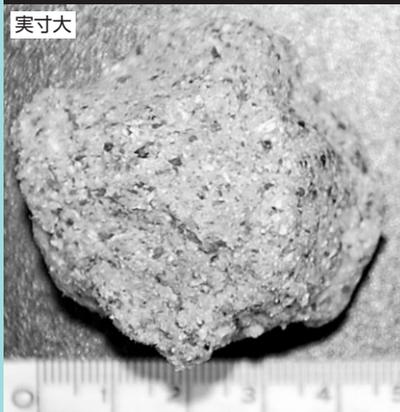
「一発」には、【ミクロ】、【極小】、【小】のサイズがあり、基本的には、水中に漂うバラケエサの煙幕と同調させるので、小さなもののほうが吸い込みは良い。しかし、小べらやジャミなどが多い釣り場では、大きめのほうが良いときもあるので、各サイズを用意したい。

使い方は、一旦水を浸透させたあと、スポンジなどの上に乗せて余分な水気を取る。直射日光に当たり過ぎると柔らかくなるので、一度に10~20粒程度を取り出し、特に夏場は日陰に作り置きしたほうが良い。また、ハリ抜けしてしまうときには、ハリに刺す前に指先で5~6回揉むとしっかりとして腰も出る。「さなぎ粉」をまぶして使用する方法もある。



### ● エサの大きさ

実寸大



## ●釣り方のコツ

- ①バラケエサがすぐになくなってしまう
- ②くわせの「一発」が抜けてしまう
- ③弱いアタリを取ってしまう
- ④ハリスが太く違和感が出てしまう

この4点が最も気をつける注意点で、特にバラケエサがバラケ過ぎ、「一発」と同調しなければ食いにはつながらない。また、アタリは「モヤ」とか「モゾ」ではなく、「一発」を吸い込んで持っていくような強いアタリなので、微妙な変化を合わせた「スレ」はへら鮎を散らすこととなってしまいます。食い渋りで超自然落下にしなければ吸い込まない場合では、ハリスを思い切った0・25号まで落とすこともある。

基本は、強烈なバラケの煙幕を漂わせ、その中にくわせ

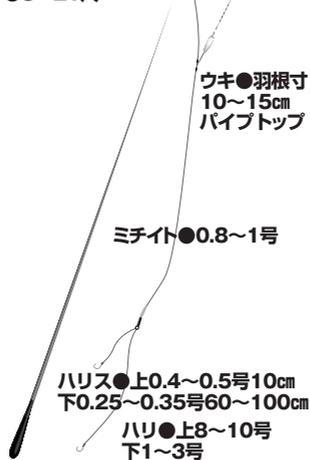
の「一発」を入れ込み、自然に水と一緒に吸い込ませるイメージが重要になる。そのため、煙幕の元のバラケが簡単になくなってしまいうのでは吸い込みもなくなってしまいます。逆にアワせても上エサが残って上がってくる位でも良い。その位バラケエサのハリ残りも重要になる。

理想的なウキの動きは、前記した通り強い消し込みなどで、ハリスがへら鮎の煽りでも張っていないときなどは弱い変化でも食っていることもある。しかし、吸い込んでなおかつ走った時のアタリのほうがより完璧でバレも少ない。

また、タナがチョーチンの場合は縦サソイの連続で、バラケ性を促進させることで「一発」を吸い込むことがある。このときは穂先を上げた瞬間に食うケースもあり、そんなときには強いアワセより聞きアワセ（そつとあわせる程度）

### ■チョーチンのセッティング

竿●8~21尺



### ■浅ダナの釣りセッティング

竿●12~21尺  
ミチイト●0.8~1号



上ハリスはしっかりしたものを使いヨレなどのトラブルを軽減させる。一方、くわせのハリスではできれば0.25~0.35号位のものを用意する。僅か0.05号の差で食いアタリがでないときもあるのでここでは繊細にしたい。ハリは、ハリ号数だけではなく、線形や重さも含めてセレクトするようになれば、より効果的になる。

ウキは、浮力のあるものが適している。タナ1mで1g以上、18~21尺チョーチンでは3g以上あっても良く、反対に小ウキではタナに入るまでに時間が掛かり過ぎ、ウフズリを招く原因にもなりかねない。パイブ・ムクトップの使い分けは、釣り方にも関係するが、しっかりとバラケエサを持たせるため、パイブトップが使いやすい。

## ●オモリ 実寸大

浅ダナ

0.25mm厚  
板オモリ  
17mm×25mm

チョーチン  
タナ18尺

絡み止めタングステン  
オモリ1g

1g



0.25mm厚  
板オモリ  
17mm×30mm



で様子をみるとハリス切れも極端に少なくなる。  
くわせエサは、自然に近い浮遊物に見せることが重要なので、ハリスはしなやかなものが適している。ハリス寸法も通常の釣りよりも長く、時には1mの超長ハリスを用いることがある。さらに、ハリスも線形が細く、軽量タイプが吸い込みも良い。

## ここがポイント① Q&A

### サワリがあるのになかなか食いアタリがでないとき

サワリがあることはタナにへら鮒が溜まっていることにつながり、その後に食いアタリがでないということは、①「一発」が持っていない、②下ハリスが絡んで食い難い、③タナが合っていない、が考えられるが、まずは①の可能性が高い。そんな時は「一発」を指先で手もみをして腰を出し、ハリ抜けを防ぐことが重要となる。



## ここがポイント② Q&A

### アタリがあるのに釣れないとき



アタリがあること自体は良い方向で、釣れない要因は、①バラケエサにあたっている、②タナが合っていない、③スレアタリになっているが考えられる。

その中でも、バラケエサに反応しているときはこの現象になりやすい。そんな時には「アタリを選ぶ」ことで、弱い変化ではなく「スパツ」と消し込むような変化だけを狙うことが良い。

# 両ダンゴの底釣り

## ●野釣り場向けブレンド

ペレ道100cc＋  
ダンゴの底釣り夏100cc＋  
グルバラ100cc＋水100cc



### ●作り方

「ペレ道」、「ダンゴの底釣り夏」、「グルバラ」を粉の時点でよく混ぜ合わせる。そこに水を注いで全体に水をまわして5～6分放置する。

### ●特徴

「ペレ道」と「ダンゴの底釣り夏」が強烈にへら鮒を寄せ、底でゆっくりとエサを膨らますのは「グルバラ」。しっとりネバのエサで、重さと膨らみがあるため底に集中的に寄せる力がある。

### ●使い方のコツと手直し

重さ、寄せ効果、膨らみはブレンドした魅エサの特徴で充分足りているので、あとは手もみを加えて粘りをだし、エサの持ち具合を微調整する。これでもエサ持ちに不安があるときには、水を入れてから20～30回ほど練りを入れると腰のあるエサになる。逆に硬さで持たすときには「バラケマッハ」をバラバラとふりかけてボソツ気をだすと良い。



### ●エサの大きさ



# ●重さがある管理釣り場・準山上湖向き 新ペレ50cc＋特S 200cc＋ 感嘆5cc＋水100cc



## ●作り方

「新ペレ」と「特S」と「感嘆」を粉の時点によく混ぜ合わせる。そこに水を注いでムラがでないように20回位混ぜ合わせる。この段階では少し柔らかめに仕上がるので、そのまま放置する。使用する際は、小分けにして押し練りするだけで良い。

## ●特徴

何と言っても「新ペレ」効果で、強烈な集魚性と重さで底にへら鮒を落ちつかせる。「特S」は底で膨らむことによりハリ切れが良くなる。「感嘆」は限界までエサを柔らかくしても持つようになる。この三拍子で魚影の濃い釣り場で威力を発揮する。また、今回紹介する3パターンの中で最も重い配合となっている。

## ●エサの大きさ



## ●使い方のコツと手直し

「感嘆」の量を調整して使い分けることと、粉の時点ですっきりと混ぜ合わせておくこと。また、水を注ぐ前にエサボウルが濡れていたりすると「感嘆」がかたまることもあるので注意が必要になる。「感嘆」の量は多くて5cc。へら鮒の寄りが少ないときには2～3cc程度の少量でも良い。この場合は、計るというよりも指先で摘んでバラバラ程度

になる。使う際は練り込むことはしないので、小分けにして押し練りを入れれば良い。若干やわらかくするときには、グルテンの手直し同様にエサの上部から手水を打ち、浸透を待てばタッチが変えられる。



# ● オールマイティに使えるペレット系

## ペレ底100cc+

## ダンゴの底釣り夏100cc+

## ダンゴの底釣り冬100cc+

## 粘カスプーン0.5~1杯+水180cc



### ● 作り方

「ペレ底」と「ダンゴの底釣り夏」と「ダンゴの底釣り冬」と「粘カ」を入れて良く掻き混ぜ、そこに水を注いでむらがでないように20回かき混ぜる。「ペレ底」は完全吸水までに夏場でも7~8分かかると、混ぜ合わせた直後はやわらかめの仕上がりとなる。そのため、必ずエサができあがってから十分に時間を置いてから使い始めるようにすることがポイントだ。

### ● 特徴

ペレットの定番的なダンゴエサで、釣り場を選ばずどんな状況下でも使用することができる。「ペレ底」は重さがあり、ペレット効果で集魚性も高く、「ダンゴの底釣り夏」と「ダンゴの底釣り冬」はオールマイティの底釣りエサで微調整もしやすい。「粘カ」は専用スプーンで0.5~1杯としてあるが、かなりベトツとしたエサにする場合にはスプーン1杯で仕上げると良い。

### ● 使い方のコツと手直し

タッチはややベトツとしていてまとまりの良いダンゴなので、表面だけを転がすだけで簡単にハリ付けすることができる。柔らかいタッチで使用する際には、ハリを通常よりもワンランク大きくするのも良い。例えば4~5号のハリを6号にしてエサ持ちを良くしながら使うこともできる。

### ● エサの大きさ



# ●釣り方のコツ

底釣りは、「ウキの動きを読む」ことが重要で、そのポイントにはナジんだウキが戻ってからのアタリを狙うことになる。突発的になじんでツン！ということもあるが、基本的には「ナジんで」、「戻して」、「食いアタリ」のパターンとなれば時合も安定する。

そのためには、

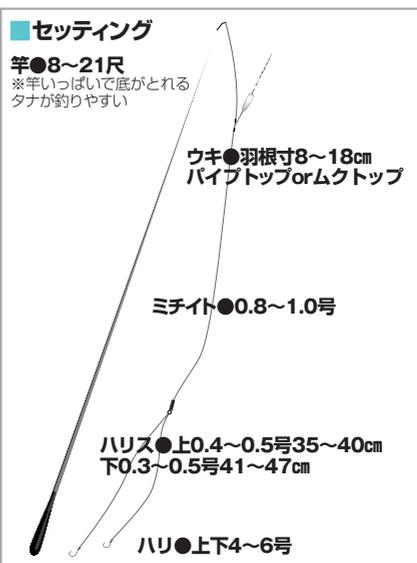
- ①エサ打ち点の前後左右の水深を正確に測ってタナを取る
  - ②ミチイトを張らせて食いアタリが伝わりやすくする
  - ③エサのタッチ・サイズに合わせたハリをセレクトする
- この3つが釣り方のコツになる。

エサ付けは、できれば空振り時のエサ切れを良くするために、面倒でも下バリはエサの下部からハリを入れて引き上げる方法が良いが、上エサはハリを上から差し込み切れ

を良くしたほうが良い。これだけの工夫で底にエサがたまって、それを吸い込むようになれば、へら鮎の姿勢が下向きになり、底釣り独特の食う姿勢となる。こうなると、ウキの動きにリズムが出て、アタリの回数が増え、タイムミングも早くなり、釣果も上がった。

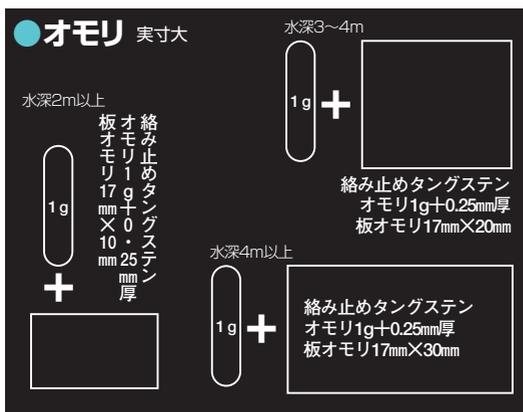
ハリスの段差は、通常5〜6cmが良いが、カケアガリの斜面などを釣る場合には段差を7〜8cm取ったほうがエサは底で安定する。ハリスの長さは、上35cm、下41cmを基準に、この長さで落ち着かないときには2〜3cm短くする。反対にムクトップを使用して、上からサワリをださせながら釣るときには、上40cm、下47cmほどにすることもある。

- 注意点をまとめると、
- ①ウキの浮力不足
  - ②エサに粘り・重さがなくウズる



盛期の底釣りは、浮力のあるウキを使用することで、底までストレートにナジませることができ、ミチイトを張ることもつながら。水深2mで1.5g以上、3〜4mで2〜2.5g、を4m以上では2.5g以上のオモリを背負うウキが良い。パイブ・ムクトップの使い分けは、ウキの戻りを優先する場合にはパイブトップが、ナジみ込みから狙うときにはムクトップが使いやすい。

- ③戻してからのアタリ以外を取ってしまう
  - ④タナが合っていない
- この4点が注意する点で、特に④のタナが合っていないければ食いアタリでもないの、最も重要だ。ウキも繊細にすることだけを優先して軽量にしてしまうと、ナジミも悪く底からへら鮎が離れることとなるので、注意したい。





# バラケとグルテンのセット釣り

## ●浅ダナから深ダナまでカバーするバラケ

新B400cc＋段差バラケ400cc＋水220cc＋浅ダナー一本200cc



+



+



+



### ●作り方

水を加えたら30回ほど軽くかき混ぜ、1～2分放置して水を浸透させる。全体がしんなりしたところで「浅ダナー一本」を絡めるように仕上げる。水深が深い場合には、水を加えて20回ほど強く練りこみ、「浅ダナー一本」を加えダマを取る感じがかき混ぜる。

### ●特徴

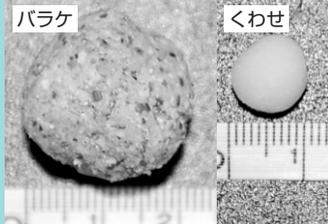
荒い麩と大量に配合されたさなぎ粉で集魚力が極めて高い「新B」と、まとまりが良くタナに急速集魚する「段差バラケ」がメイン。それを「浅ダナー一本」でまとめると、手揉みひとつで浅ダナから長ザオのチョーチン釣りまでをカバーできるバラケとなる。また、「浅ダナー一本」に代えて「バラケマッハ」を使用するとボンタッチの食い渋りに強いバラケとなる。

### ●使い方のコツと手直し

バラケはつまんだものを数回指先で揉んで、浅ダナでは5円玉大、チョーチンでは10円玉大にエサ付け。このときのトップのナジミ幅は、5～6目盛りしっかり入れる。ナジミ幅が少なければ手揉みの回数を多くして調整。アタリが遅くなったりトップの戻りが遅い場合には、手揉みの回数を少なくするか、手水を1回打ち軟らかく手直しする。それでもバラケ性が回復しなければ手水を1、2回打ち、「バラケマッハ」ひと握りを加えて開きを良くすると良い。

## ●くわせ グルテンα21 40cc＋ 水50cc

### ●エサの大きさ 美寸大



# ●釣り方のコツ

グルテンのセット釣りは、落ち込みからガンガンアタることは少ないため、トップをしつかりナジませた位置でアタリを出すのが基本的な攻め方。バラケでタナに集魚し、長くした下ハリスの落下途中からナジみ切るまでに食わせる釣り方だ。そのため常にトップを深くナジませてへら鮎のタナを作るのがコツ。アタリはトップがナジみ切る寸前から、1〜2目盛り返す間の鋭いものを狙っていく。

理想的なウキの動きは落ち込みからサワリが出て、深くナジんだ瞬間にズバツと入るもの。あるいは完全にナジんだところでサワってツンとくるリズムがいい。そのためには、上ハリスを長めにすると、へら鮎の気配が読みやすくエサ調整の方向性も掴みやすくなる。

重要なポイントは、サワリの出やすいタナを徹底して攻めることだ。グルテンを追う環境はへら鮎の食いが渋いか、エサを追いつめた時季。そのためへら鮎のタナが日によって、あるいは混雑によっても変化する。そこをいち早くキヤッチすること。浅ダナでは、ウキの位置を動かし1〜2m

半くらいを探り、チョーチン釣りでは竿を代えて、その日のベストのタナを見つけたい。また、へら鮎の寄りがいい場合にはエサがもまれて、ハリ抜けすることがある。バラケはしっかりとナジミ幅がでるのに対し、くわせエサのグルテンは持っているかどうか分からないことがある。ここがグルテンセット釣りの落とし穴といえる点。そのため下バリは4号クラスを使っ

てしっかり持たせることがポイントになる。

野釣りが中心になるので風流れに対応するため、ウキは大きめが釣りやすい。浅ダナでは大きなバラケでもトップが沈没しないよう、太めのパイブトップが有利。チョーチン釣りでは釣るタナが深くなり、ここで集魚の幅を狭くするにはウキは大きすぎる程度のものでかまわない。逆に小さいとバラケを持たせにくくなったり、落ち込みの動きが強くて、アタリが安定してない難点がある。

### ■ チョーチンのセッティング

竿●15〜24尺  
ミチイト●0.8〜1号

ウキ●羽根寸10〜13cm  
ムクトップ

ハリス●0.4〜0.5号  
上20cm、下60cm

ハリ●上6〜7号、下4号

### ■ 浅ダナのセッティング

竿●12〜21尺  
ミチイト●0.8号

ウキ●羽根寸5〜7cm  
パイブトップ

ハリス●0.4号  
上10cm、下40cm

ハリ●上5〜6号、下4号

### ●オモリ 実寸大

浅ダナ

0.25mm厚  
板オモリ  
17mm×10mm

タナ18尺

1g +

絡み止めタングステンオモリ1g+  
0.25mm厚板オモリ17mm×20mm

# ここがQAポイント1

## サワリがあるのに食いアタリがでないとき

まずくわせエサが持っているか確認しよう。グルテンだけハリ付けしてナジミ幅をチェック。サワリの出方は2種類ある。

ひとつは、落ち込みで強いサワリがでるが、ナジむと静かになる場合。この場合は、へら鮎のタナが高いかバラケの開きすぎによるもの。つまんだバラケの手揉みを多くしてひと回り小さくエサ付けするか、サオを2~3尺短いものと交換する。

もうひとつは、完全にナジんでからサワリがでるときだ。この場合は、グルテンのタッチに変化をもたせてみよう。例えば使っているグルテンに手水を垂らして軟らかくしたものを大きめにハリ付けする。反対に硬めにつくったものを小さく付けるなどして様子を見よう。



# ここがQAポイント2

## アタリがあるのに釣れないとき

アタリがでるのは、ハリス、ウキなどの選択が合っていると考えたい。そこで、グルテンを硬軟のタッチだけでなく、重さを変えてみよう。イトズレの動きが減り、下のハリスが張るので明確なアタリがでる。このとき、「グルテンα21」に「いもグルテン」をブレンドするか、「野釣りグルテン」を試すと良い。

この他、アタリがでる頻度にもよるが、空振りが続く場合はアタリを送ってみるのも一手。バラケに興味を示しているときの最初のアタリはバラケにスレていることがあるからだ。しっかりトップをなじませて戻す途中のものを狙うと、へら鮎が落ちてアタリを絞りやすくなる。



# 両グルテン&両マッシュの宙釣り

## ●管理釣り場&野釣りの基本パターン

わたグル100cc+グルテン四季  
100cc+水220cc



+



+



### ●作り方

粉に水を加えたら全体を10回ほど混ぜて3分放置。固まったら底から掘り起こすようにしてアエーを絡めてボウルの隅に寄せておく。いいエサを作るには粉と水の量を正確に測ること。とくにグルテンは計量カップで粉をすくっただけと、底をたたいてきっちり入れるのでは、粉の量に違いがあり、当然、仕上がりにも違いがあるので、自分なりの基準をつくることだ。

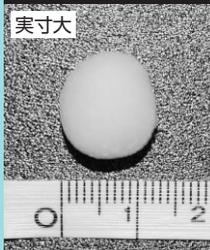
### ●特徴

しっかりハリ持ちして膨らみがいい「わたグル」と急速に膨らんで早いアタリがでる「グルテン四季」の組み合わせ。指先にベトツとした感じがなく、時間的な変化が少なく釣れるタッチが長続きする。

### ●使い方のコツと手直し

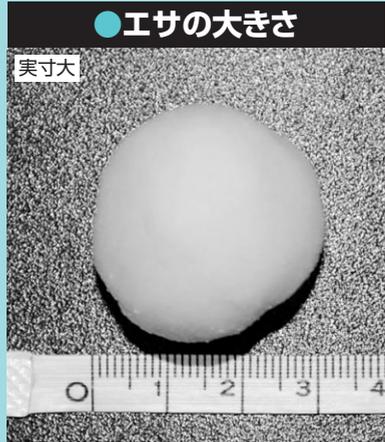
グルテン系のエサは手水を1、2回打って軟らかくするまではいいが、いじりすぎると開きが極端に遅くなる性質がある。そのため開きを良くするには角張らせてエサ付けし、持たせたい場合は丸く付けるのがいい。また、硬くする場合は新たに水量を少なくしてつくり直すことをお勧めする。

### ●エサの大きさ



# ●ダム湖などの大型狙い

## マッシュダンゴ400cc+ 水200cc



### ●作り方

粉に水を加えたら全体を10回ほど混ぜて3分放置。固まったら底から掘り起こすようにしてエアを絡めてボウルの隅に寄せておく。グルテンエサ同様に、粉の計り方ひとつで仕上がりのタッチが変わってしまうので注意したい。

### ●特徴

マッシュポテトがベースのエサだが、これまでマッシュポテトはバラケ性が強いのでハリ持ちが良いエサをつくるのが難しかった。しかし、マッシュダンゴは単品でまとまりが良いエサが簡単にできる。しかもサクリ感がありバラケ性が長続きする特長がある。

### ●使い方のコツと手直し

マッシュダンゴは軽めなので重くしたいときは「尺上」、開きを良くして寄せたいときは「巨べら」をそれぞれブレンドすると良い。

ただし、一度作ったエサに粉を足していくことはオススメできないので、性質を変えたいときは、新しく作り替えることだ。

### ●重くしたいとき

マッシュダンゴ200cc+  
尺上100cc+水200cc

### ●開きを良くして寄せたいとき

マッシュダンゴ200cc+  
巨べら200cc+水200cc



# ●釣り方のコツ

両グルテン、両マッシュユの釣りは集魚材が入っていないので寄せ効果が弱い。そのためエサ打ちのピッチを上げて寄ったへら鮎を長いハリスで追わせて食わせる釣り方となる。エサの手直しの幅も狭いので、イメージ通りのアタリがでなければ新しく作り直すのが早道だ。

長ハリスを使用して落ち込みでサワリをだすのがコツ。そこからトメや戻しといったアタリを狙っていく。それができるようにハリスの長さでエサのタッチを調整するわけだ。これは両マッシュユの釣りも同じ。しっかりとナジミ、待つてからのアタリはでにくくなるので、ナジミ切るまでが勝負と考えたい。

エサの調整に関しては、両グルテンの釣りは魅エサのように練り込んで調整すること

は少ない。持ちが弱ければ「わたグル」の割合を多くし、開きを良くしたい場合には「グルテン四季」を多くする。要するにエサの性質を利用してエサ持ちを調節するわけだ。両マッシュユの釣りでも開かせたいときは「巨べら」、重さをつけたいときは「尺上」をブレンドし、状況に応じてこれらの量を調節するのがカギとなる。

さらに野釣りの大型狙いでは、弱い動きに絶対に手をださないこと。ここでスレバラシをすると、その後アタリがでないことがあるためだ。力強く入るものだけを狙うことだ。

<p><b>両グルテン</b></p>	<p><b>両マッシュユ</b></p> <p><b>Point!</b></p> <p>長ハリス</p> <p>落ち込みでサワリを</p>
<p>開きを良くしたい</p>	<p>重さをつけたい</p> <p>アタリがでなければ作り直す</p> <p>モリ</p> <p>野金釣り</p> <p>弱いアタリは送る</p>

**●オモリ** 実寸大

管理釣り場の浅ダナ

0.25mm厚  
板オモリ  
17mm×15mm

ダム湖の浅ダナ

絡み止めタング  
ステンオモリ1g

1g **+**

0.25mm厚  
板オモリ  
17mm×20mm

**■両マッシュユのセッティング**

竿●18尺以上  
ミチイト●1.5号

ウキ●羽根寸  
10~13cm  
ムクトップ

ハリス●0.8~1号  
上40cm、下60cm

ハリ●上下10~15号

**■両グルテンのセッティング**

竿●16尺以上  
ミチイト●0.8号

ウキ●羽根寸  
6~8cm  
ムクトップ

ハリス●0.4号  
上40cm、下60cm

ハリ●上下6~8号

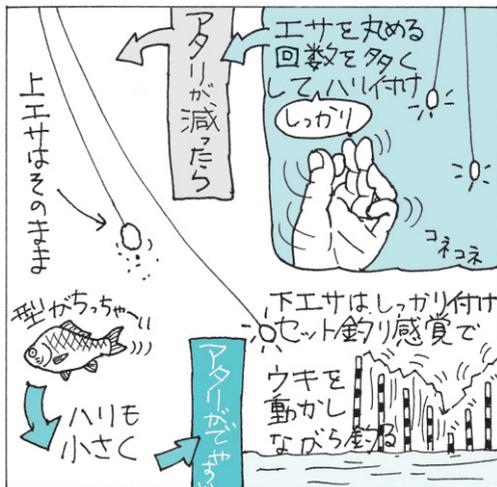
以前の両グルテンの宙釣りは抜けるいいグルテンを使い大きなウキでタナまで早く沈める釣り方がよかった。だが、現在では芯残りのいい小エサとオモリ負荷量の少ないウキへと釣り方が変わってきた。

そのためウキの選択を誤るとアタリがでにくくなる難点がある。さらにこの釣り方は初夏ではセット釣りから両ダンゴに変わる端境期に有効だ。釣れる期間が短いので近況を基に釣り方を絞りたい。

## ここがポイント① Q&A

### サワリがあるのになかなか食いアタリがでないとき

エサの開きが良すぎて芯残りが弱いことが考えられる。つまんだエサを丸める回数を多くしハリ付けしてみよう。ただ、毎回しっかりエサ付けするとアタリが少なくなる場合がある。このときは手揉みを少なくしたものを上下のハリに付けてウキを動かしながら釣るか、上はラフ付け、下はしっかり付けるといったセット釣り感覚で攻めるといい。あるいは型が小さいときはハリをワンランク小さくするとアタリがやすくなる。



## ここがポイント② Q&A

### アタリがあるのに釣れないとき



エサが硬いか大きすぎるのが原因。いきなりエサ全部をいじるのではなく小分けしたものに手水を1、2回打ってやわらかくしたものをひと回り大きくエサ付けしてみよう。あるいは、上はそのままのエサで、下は硬めにつくったものを小さめにハリ付けるといきなり釣れ始めることがある。エサ調整の幅が狭いだけに、調整は大きく変化させるのではなく段階を踏んで手直しするのがコツだ。

特別講座

# エサ使いのコツを 覚えよう



## 魅エサについて 知っておこう

魅エサには色々な性質・特徴がありますが、これはそういった性質を持った魅に、さらに特徴を際立たせる効果を狙い、さなぎ粉やペレットなどが入り、ひとつの魅エサとして製品化されています。

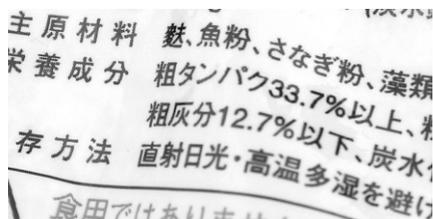
エサ袋の裏書きを見ると分かりますが、そのエサにどんな素材が入っているかが記されています。入っている素材から、そのエサの性格を掴むこともできますので、参考にしてみましょう。

エサの性質とは、重い・軽い、バラけやすい、まとまりやすい、粘る・粘りにくいなどに加え、集魚効果が高い・弱いなどがあり、これらの要素を組み合わせることで、エサ自体に特徴が生まれてきます。

たとえば、重くてまとまる、

重くてバラける、軽くてまとまる、軽くてバラけるなど、色々な特徴があります。この特徴を状況に合わせて使いこなすことが、へら鮎釣りの面白さでもあります。

ですから、まずは単品の性質を知っておくことが大切で、たとえばブレンドしたとしても、そのブレンドがどういう特徴を持っているかを理解していれば、そこに何かを足すことで、より自分が求めるエサに仕上がるのです。



エサのパッケージの裏には主原材料が明記されている。ここを見ることで、そのエサの性質を探る手がかりとなる。もちろん、手にとっての重さも役立つ情報である。

数多く紹介されているブレンドもこのような考えのもと上手く組み合わせられているので、わからないときはそれをマネするのも手ですが、自分で使いやすいブレンドを見つけるのもより釣果に結びつける秘訣でもあります。ですから、エサ個々の性質を覚えておくことが大事なことは言うまでもありません。

エサの性質を理解することは、より自分の釣りにプラスの要素をもたらせてくれます。



水中でどのように膨らみ、バラけるのかを見ておくと、そのエサのイメージが付けやすい。とくに単品での性質を把握するには役立つ。

とくに、極端にはっきりした特徴のあるエサは別として、似たようなエサでも、実際にはそれぞれ違った性質を持っているのです。似たようなエサを比較して、どっちが重い、バラけるなどをしっかり把握していれば、もう少しこうしたと思うときに、すぐ次のブレンドが思い描けるのです。

一度、単品でエサを作って、水槽などで見比べてみると、落下スピードやエサの膨らみ

など、このエサとこのエサはこう違うのかなどが分かってくると思えます。水中を想像しながら釣るへら鮎釣りにおいて、たとえ水槽の中だとしても、エサのイメージを頭に入れていると実際の釣りに役立つこともあります。自分の考えでエサを組み立て、色々試していくことで、よりへら鮎釣りが面白くなるでしょう。

## 盛期のエサ使いのコツ

夏場の釣りのメインは両ダンゴと言えるでしょう。この両ダンゴの釣りのポイントとして、エサが持っていることが上げられます。高活性時のへら鮎の煽りは、かなり強烈ですので、ハリからエサが抜けてしまうことも多くなります。

そして、へら鮎がエサを食うには、ハリにエサの芯が残ってなければなりません。エ

サの芯がなければ、食いアタリがでなかったり、カラツンになったりしてしまうものです。

この芯を作るにはどうしたらよいのでしょうか？ 麩エサというのは練ってはいってはいじめて芯ができるものなのです。例えば、粘りのある麩でも、粘りでまとまりはありますが、水を吸って膨らめばハリから抜けてしまいます。練ることはじめて、芯ができるものということを知っておきましょう。

エサは練らなければ芯がでにくい。怖がらずに練ることが盛期には必要だ。



よう。練ることに抵抗を感じる方もいるかもしれませんが、エサが持たないと感じたなら練っていくことも盛期では必要です。

ただし、ただ単に練れば釣れるかと言えば、そうなら無いのがこの釣りの面白さ。適度なバラケやエサの膨らみがあつて、さらにハリに芯が残っていることが必要です。

練ること以外でエサを持たせる方法としては、大きく分

けて2種類あります。ひとつは、グルテンを含む「ダンゴの底釣り夏」や「グルバラ」を使うことです。このタイプは、グルテンと同じように膨らむので、あるていどエサの形を維持できるので、持たせる効果があります。

もうひとつは、粘る素材の麩でできている「浅ダナ一本」や「バラケバインダーフラッシュ」を使うことです。こちらは、粘る麩で接着効果を生

みますが、適度にバラけながら持たせることになります。そして、これの延長線上に、よりその効果を強化した「粘力」があります。この「粘力」を使うと、かなりやわらかいエサでも持たすことができます。

近年の傾向としては、軽くて粘りがあり、少しボソ感があるものが釣れスジのタッチと言えるでしょう。このような傾向を踏まえて作られたのが、ダンゴの釣りでベースとして使える「ガッテン」や「天々」です。この2つはどちらも軽い部類のエサですが、「ガッテン」のほうがより軽くなっています。そして、バラケ性に関しては、「天々」のほうがやや開くようになっていきます。

この違いは、狙うタナの違いで、浅ダナをメインにした「ガッテン」は、より軽くしながらも開きを少なくして、ゆっくりタナへ入るイメージで



両ダンゴのベースとなる「天々」と「ガッテン」。現代の釣りにマッチして作られているので、単品でも充分釣れる。

す。一方の「天々」は、チョーシン釣りをメインにしますので、浅ダナのエサに比べて少し重さをつけ、また、タナへ誘い込む適度なバラケ性を持たせてあるのです。

この2つをメインにエサを組み立てれば、大きな失敗をすることなく、釣りが組み立てられます。あとは、状況にあわせてここにどんなエサを足すかがポイントです。

落下中のサワリを抑えなが



練ったエサをチモトをしっかり押さええてエサ付けすることで、ハリ持ちがよくなる。へら鮎の煽りが強い夏場は、とくに注意してエサ付けしたい。



ポソツ気がほしいときには「バラケマッハ」を使う。



軽くて芯持ち良くさせるなら「浅ダナー本」。



「粘カ」を入れれば、やわらかいエサでもタナまで持たせることができる。



開きを抑えタナへしっかり入れたいときは「グルバラ」。



ペレットの釣りのベースに最適な「ペレ道」。



開きを維持し、「ペレ道」と相性の良い「白べら」。

らしつかりタナまで入れたいのであれば、「グルバラ」、より軽くして持たせたいのであれば「浅ダナー一本」や「バラケバインダー フラツシユ」、ポソツ気を強くしたいときは「バラケマッハ」などが代表的な組み合わせです。

あとは、エサのタッチや大きさの工夫で対処してみてください。ちよつとしたタッチやエサの大きさの違いでも、釣果には大きく跳ね返ること

もあります。

また、エサを手直しするときは、小分けして行うことをオススメします。一度手を加えたエサは元に戻すことはできません。ですから、かならず、基エサを残しておくことです。

## ペレットも効果的

宙釣り・底釣りを問わず、ペレットを使ったダンゴ釣りも夏場は抑えておきたい釣り方です。このペレットが効果

的なところは、ペレットに反応する目方のある大型を中心に釣れることと、重さによってウワズリを抑えたり、エサをタナへ入れやすかつたりすることです。

宙釣りでは、ペレットに反応するへら鮒をメインに寄せたいために、ブレンドしやすい「ペレ道」をベースにさまざまな粉の入っていない白い魅とのブレンドが一般的です。開きが必要な場合は、「白べら」や「軽魅」、開きを抑える場合は「バラケバインダー フラツシユ」をブレンドします。

以前より大型ばかりが釣れ続くことが少なくなつたと言われますが、まだまだその爆発力は健在です。ペレットと

白い魅の割合を調整しながら、ウキの動きがよくなる接点を探っていくとよいでしょう。

底釣りでは、エサを底へ置いてくるイメージでエサ作りをします。基本的には「ダンゴの底釣り夏」など、底釣りのエサとブレンドさせますが、活性の高い時期だけに、いかに底へへら鮒を向けさせるかがポイントで、これにもペレットの効力が充分に活かされています。ここに、より開きを抑える狙いで「粘カ」を使うことが多いです。

ペレットはその威力が充分発揮される状況下では、敵なしの釣りが展開できますので、ぜひ使いこなしたいエサのひとつとなります。

# 進化系BB、 新登場。

バラケバインダー

ネバリを出さずにエサを持たせるブレンドエサ、  
「バラケバインダーフラッシュ」。

麩エサとブレンドすることで、ネバリことなく各々の粒子をつなぎ、しっかり芯残りするエサに仕上げる働きをする「バラケバインダーフラッシュ」。練り込まなくてもエサが良くまとまるため、ダンゴエサ本来の特長を活かしたエサ調整が可能になります。また、混ぜ合わせても重さへの影響が少ないため、沈下バランスの調整が自由自在に。エサ付けしやすい手触りの良さも備えた、進化系BBの新登場です。浅ダナからチョーチンまでの両ダンゴや、セットのバラケエサの調整にどうぞ。

●バラケバインダーフラッシュ  
200g



丸マルキュー株式会社

〒363-8509 埼玉県桶川市赤堀2-4 TEL.048-728-0909  
ホームページアドレス <http://www.marukyu.com/>

釣りでエサに困ったらiモード  
<http://www.marukyu.com/>

マルキューホームページ内の「へら鮎天国」では、新鮮な釣果情報を掲載中。あなたのお気に入りの釣り場の情報が、見つかるかも。  
<http://www.marukyu.com/> マルキューへら鮎メールマガジンも、お申込はこちらから。

釣れるヒント満載!!  
へら鮎天国